

説教:ルカの福音書8章40～56節

説教:あなたの信仰があなたを救ったのです

1 二つの疑問

1) なぜ立ち止まるのか

今日は、長血の女性のほうに焦点を当てながら、信仰とはなにかについて考えてまいります。みなさんはここを読んで、様々な疑問を持たれたことでしょうか。二つの疑問に絞って考えます。一つ目。ヤイロの娘が死にかけているというのに、なぜイエスは立ち止まって前に進まないのか。私はこの箇所を最初に読んだとき、それがわからなくて非常に戸惑ったことを覚えています。例えていえば、病院に向かっている救急車が途中で止まって動かなくなったようなものです。「今急いでいるから、後でまた来てください。そのときゆっくり話を聞きます。」普通はそうするでしょう。ところがイエスは腰を据えて、この女性と話し込み、おそらく小一時間は動かなかったのではないかと想像します。そうしたら最悪のことが起こってしまう。49節。ヤイロの家から使いの者がやってきて、こう言うのです。「お嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすことはありません。」

イエスが、長血の女性を話し込んでいたとき、ヤイロはどう思ったのでしょうか。聖書には何も書いていません。でも私たちは心臓をどきどきさせながらヤイロの気持ちを考えてしまいます。「早く、早く。でないと娘が死んでしまう。」そして、自分もこれと同じような経験をしたことを思い出します。愛する家族が重い病気にかかってしにそうだというときに、必死になって神に祈る。けれどもまるで祈りが聞き届けられなかったかのように亡くなってしまふことがあります。そんなとき、神は何をしているのか、なぜ助けてくれなかったのか。そんなふうに神に対して怒りをぶつけることがあります。おそらくヤイロもそうだったでしょう。イエスがいっしょに来てくれると聞いて、これで助かるかと期待していた分だけ、間に合わなかった聞いたとき、イエスに対する失望は大きかったでしょう。そんなヤイロのことは無視するようにして、なぜイエスは長血の女性と関わろうとしたのか。それが一つ目の疑問です。

2) なぜ捜し出すのか

二つ目の疑問。これは一つ目の疑問と重なることですが、なぜイエスは自分に触れた者を捜し出そうとしたのでしょうか。この女性がどんな思いをし

てこんなことをしたのか分からなかったのでしょうか。そもそも、この女性がわざわざ人に隠れるようにしてイエスの衣に触れようとしたのには、それなりの深刻な事情があったのです。

この女性は、十二年間不正出血に苦しみ、いろいろな医者にかかったけれど治らなくて持っていたお金を使い切ってしまいます。働こうにも病気で働くことができません。どうしようかと、将来に絶望していたとき、イエスのうわさを耳にします。もしかしてイエスに触れさえすれば癒されるかもしれない、そういう一心でやってきた。ところがそこに大きな壁がありました。レビ記15章25節で不正出血がある女性は汚れていると言われ、そういう女性がほかの人に触れると、触れられた人も汚れると書いてあるのです。ということは、この女性はイエスに触れたことでイエスを汚れさせてしまったことになる。だからなかなか前に出られないのです。

イエスがそのことを知らないわけはありません。イエスに隠れて触れて汚れさせたということで、大勢の目を見て恥をかかせて、懲らしめようとしたのでしょうか。確かに聖書では、神の前に罪の告白をした者が罪から救われると書かれています。イエスはこの女性の罪をあいまいにするのではなく、厳しく罪の告白を求めようとした。それでこうした。そういう言い方はできるでしょう。しかし、それならば人々が見ているところではなく、一対一でよいはずですが。そもそも、イエスはこの女性を厳しくとがめるようなことはしていません。もっと別の目的があったと考えるべきでしょう。

2 力を与えるイエス

1) 信仰によって衣の房に触れたとき

そこでもう一度44節を読みます。「彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。すると、ただちに出血が止まった。」ここで「出血」と訳していることばを直訳すると、「血が流れ出ること」となります。それを頭に入れてから、46節と比べてみましょう。「だれかがわたしにさわりました。わたし自身、自分から力が出て行くのを感じました。」非常に不思議なことばです。イエスのからだだからいったいどんな力が出ていったのだろうかと考えます。もちろん、ただ触さえすればイエスから力が出てくのではない。周りには群衆

がいてたくさんの方がイエスに触れていたけれど、不思議なことは何も起きません。この女性が信仰をもって触れたので、イエスから流れ出るものがあったということです。それで直ちに血の流れ出るのが止まりました。

2) 血

その血についてですが、申命記12章23節にはこう書いてあります。「ただ、血は決して食べてはならない。血はいのちだからである。いのちを肉と一緒に食べてはならない。」

長血の女性が病院に行ったなら、「あなたは不正出血という病気ではあるけれど、心臓が動いているので生きています」と診断されるでしょう。しかし霊的に言えばどうでしょう。いのちである血が絶えず外に流れ出ていたのですから、イエスの目には死んだ者と同じに見えています。それがいま血が止まって癒されたということは、霊的には死からよみがえったこととなります。そのときイエスから力が流れ出た。いったい何が流れ出たのでしょうか。

3) 手を取ったとき

そこで今度は55節を読みます。「すると少女の霊が戻って、少女はただちに起き上がった。」長血の女性の話とヤイロの娘の話は、別々の話してはなくてつながっていて、同じテーマを別の側面から語っていると見るべきでしょう。

日本では昔から、死んだ者の霊は空中を漂っていると考えがあったそうです。ですから「少女の霊が戻って」とあると、空中に漂っていた少女の霊が元のからだに戻った、そんなふうを考えたくります。でも、人のいのちは血にあると言われていたのです。人がよみがえるためには、いのちである血がなければなりません。では、人を生き返らせることのできるそんなすばらしい血はどこから来るのでしょうか。イエスが少女の手を握り、「子よ、起きなさい」と叫ばれたとき、イエスから力が出ていったらという事は長血の女性のことから推測できます。ではその力とはなにか。少女がよみがえったのですから、その力とはイエスの血だということになる。その血をいただいてヤイロの娘はよみがえった。ですから、長血の女もイエスから力と呼ばれるいのちの血をいただいて救われていった。そのように考えられます。

3 あなたの信仰があなたを救ったのです

1) 前に出て来るのを待つイエス

そこまではわかりました。でもこれだけでは、なぜイエスはわざわざ立ち止まって自分に触れた者を捜し出そうとしたのかがわかりません。もういちど長血の女がどんな動きをしたかを整理しましょう。

44節。「彼女はイエスのうしろから近づいて、その衣の房に触れた。」その次に47節前半。「彼女は隠しきれないと知って、震えながら進み出て御前にひれ伏し(た)。」最初、この女性はイエスのうしろに立っていましたから、当然のことですがイエスの背中しか見えません。しかしその後で御前に出てひれ伏したとき、何が見えたでしょう。イエスの御顔が見えています。怒りの満ちた顔だろうと思って見上げると、なんとそうではない。満面の笑みを浮かべて、まるでこう語りかけてくるようなのです。「わたしはあなたとお話をしたくて、ずっと来るのを待っていたんですよ。」もしあのとき、隠れたままで逃げるようにして帰ったなら、どうなっていたでしょう。確かにからだは癒されて元気にはなったかもしれませんが、でも、ずっと罪悪感にさいなまれたのではないのでしょうか。自分は悪いことをしてしまった。今度はその思いで苦しまなければならなかった。でも今、イエスに呼び止められたことで、安心して行きなさい、と声を聴くことができた。加えて神の顔を見て、自分が赦されていることを確信できた。罪責感に苦しむ必要がないと言ってくれたのです。これ以上の幸いはありません。

2) 民の前で話した

でもそこまで来るのには、やはり大きな葛藤がありました。御前に出て自分がしたことと、自分の身に起きたことを民の前で話さなければなりません。そのことだけはしたくなかったので、隠れて逃げようとしていました。顔から火が出るくらい恥ずかしいし恐ろしかった。

でももしそうしなかったらどうなっていたでしょう。この女性は十二年もの間、汚れていると言われて続けて苦しんでいたのです。私はもういやされました、と自分で言っても誰が信用したでしょうか。「嘘をつくな。お前は汚れた女だ」と言われて、なおも差別され続けたのではないか。そして自分を責め続けたでしょう。

でも、神の子であるイエスが今、あなたはもう汚れてはいない、あなたの信仰があなたを救った、と人々の前で宣言してくれたのです。あなたは今日からきよい者になったのだから安心して行きなさい。イエスがこの女性を呼び止めたのには、

そんな目的がありました。それだけではありません。やってはいけないと思っていたこと、イエスの衣に触れるということ、そのことをイエスはあなたの信仰だとさえ言ってくれたのです。それはこう言っているのと同じです。「あなたの汚れという罪で汚れるためにわたしはあなたとのところに来たのです。わたしは喜んで罪を引き受けます。その代わりに、あなたはわたしからいのちの血を受けなさい。」そのようにして、この方は十字架で流されたご自分の血を分け与えます。

3) ヤイロの身に起きたこと

これとおなじことはヤイロの身にも起きました。彼は会堂司でしたから、イエスに反対する勢力である祭司長や律法学者の仲間です。日本的に言えば「ムラ」に属していて、イエスとは距離を持っていた。そんなヤイロですからイエスを信じるといふようなことはなかったはずで

ところが娘が死にかけているとき、もうそんなことは言っていられない。なりふり構わず、人々の前でイエスに土下座をして「家に来てください」と願ひ出る。その結果、紆余曲折はあったにしても、娘が救われたのですからヤイロにも信仰があったということになる。ヤイロが娘の死の知らせを聞いて絶望していたときでさえも「恐れなくて、ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われます」と語って、信仰を失わないように励ましませて下さいます。

私たちも、時にはヤイロのような状態に追い込まれることがあるでしょう。そんなときに、信仰をしっかりと持ちなさいと言われても、とてもできそうもありません。うろたえてしまう。しかしイエスは言われたのです、「恐れなくて、ただ信じなさい。」娘が死んでうろたえない親はいません。信仰を失いかけるのは当然です。でもそんなときでもイエスが信仰をとりもどして下さる。

なぜイエスは立ち止まってしまったのでしょうか。ヤイロはそのために娘が死んだという知らせを聞かなければなりません。すべてがわかるわけではありません。でも私たちは、ヤイロのことを通して、信仰はイエスが与えてくださるものであることを知ります。そして、私たちの目には、もう間に合わない、遅かったと、というような状態になったとしても、決して遅くはない。イエスの血によってどんな者でも信仰によってよみがえることができる。そのことを教えてください。